

「研修を通して我を省みる」

福島県立医科大学附属病院 初期研修医（1年目） 反町光太郎

ハワイでの研修全体を振り返ってというお題だが、全7日間の行程をただ経過とともに書いたとしても何かつまらないものになりそうなので、私は今回の研修全体を通して特に印象に残ったこと、得たものを pick up して書きたいと思う。

「ハワイでの研修」と聞くと多くの人がバカンス的な要素が強いと感じてしまうが、今回の研修はまさにその名の通り「研修」だった。確かに、買い物など現地でしか味わえないようなことはそれなりに堪能したが、やはり一番に印象に残っているのはハワイの病院の中を直接見学し、現地のドクター、レジデントたちと交流できたことであり、そのことがとても良い経験になったことは間違いないだろう。

良い経験と言ってもかなりアバウトな表現だろう。私にとっての今回の研修で得たことはズバリ「刺激」であると思う。

全日程を通して痛感したのはやはり語学力の必要性だろう。日本にいる限り読み書きの力さえ何とか身に付けていれば、それなりに上手くやっているとっている。しかし、当然ではあるがハワイでは「+話す、聞く力」が必要となってくる。

私は今回のメンバーの中でも英語力はかなり劣っていると感じていた。現地のドクターが英語で説明してくれていることに関して、大抵の人は理解し相槌を打っていたが、私はそれに追いついていない。コミュニケーションに加わる意思は十分にあったのだが、加わる力が足りていなかったのだ。

そんな自分の語学の未熟さが情けなくて悔しくて・・・しかも、我々が目指しているのは医療であって英語ではない。英語はあくまでもツールのはずなのに、そのツールの時点で遅れを取っている自分、と考えるだけでさらに悔しさがこみ上げる。しかし、こういった感情が逆にこれからの「刺激」になったのだと思う。

事実、現地で内科レジデントとして研修している日本人ドクターの方から



お話を伺う機会があった。その方は帰国子女でもなければ、ハーフでもない。本格的な語学学習はいつから始めたのかと聞くと意外や意外、研修し始めてからだというのだ。しかも研修し始め当初は私と同じくらいの語学力だったという。しかし、その時から英語の勉強を意識的にはじめ、今となつては驚くほど流暢な英語で現地のドクターとコミュニケーションをとっていた。努力次第ではここまで上達できるんだという見本を見せつけられたような感じだった。

現在の自分の語学力、そして勉強を意識的にすることでここまで上達するという目標的な方に巡り合うこと、そして英語の学習意欲をこれほどまでに掻き立てられることは日本ではなかったのかもしれない。これぞまさにハワイで得た刺激であり、海外でないと経験できないことなのだと思う。

研修のプログラムが急遽変更になり、私を含む一部のグループはハワイの medical school 1年生の授業風景を見学できることになった。我々が見学した John A. Burns School of Medicine (JABSON) は「problem based learning=PBL」という授業形態をとっていた。言ってしまうえば我々が学生時代にやったチュートリアルのようなもの。つまり、スモールグループに分かれそこに指導教官が1人つく。そして教官は1つの症例内容を小出しにしていき、出された症例に対して学生が疑問、鑑別を自由に出し合い診断を進めて、今後学習が必要な項目を自分たちで見つけていくというものである。

今回セッションに参加してくれた1年生はどう見ても我々と同じか若干若目の男女数名。

まだまだ、どことなしか青さを感じさせる風貌の学生たちだった。

しかし、授業が始まると出てくるは出てくるは様々な疑問、必要な検査、鑑別。しかもそれらはどれもそれなりに的を得ており、本当に1年生かと思わせるよ



PBLの風景

うな議論の内容だった。全員がまんべんなく発言し、逆に教官はほとんど話さず事の運びを見守るのみ。

知識の豊富さ、疑問点のフォーカスの当て方、積極性、どれをとっても申し分ない、まさに圧巻のPBLだった。

後から学生から話を聞く機会がありいろいろと聞いてみたが、私が驚いたのはそもそもハワイの医学生には大学生活を楽しむという意識は根付いておらず、「medical school=学ぶところ」という意識がとても強いそうだ。学生生活を楽しむのは高校までで、それが終わると医師を目指す者は一瞬たりとも気の抜けない医学部受験という競争社会に突入していくのだ。御存知のとおり、アメリカは一般の4年制大学を卒業してから医学部（Medical school）に入学する。しかし、その医学部に入るためには大学4年間の成績がとても影響するのだ。内申点が基準点に満たなければ医学部受験をすることさえできない。だからこそ大学に入った途端に、みな死に物狂いで勉強するそうだ。そういった生活は、晴れて医学部に入っても変わらない。自分の専門を決めるにも成績がものを言うからだ。こういう社会システムの影響もあって、とにかく医学生は勉強するのだ。授業の予習なんて当たり前、だからこそあのような素晴らしい授業を繰り広げることができるのだと強く感じた。そこで自分の生活を振り返ってみた。学生生活は・・・楽しかった。楽しさが強く残り、テストはどちらかと言えば乗り越えるべきものとしてとらえていた感が強い。今までの自分の学生生活を後悔するわけではないが、理由如何にせよものすごく勉強している人には当然負ける。それが日本人だろうとアメリカ人だろうと医者は医者、知識がない者はいくら情熱があっても人当たりが良くても大成しないと私は思っている。そういう意味では私は完全に大成しない部類に入っているのだと思う。世界中の医者の中でどんどんと遅れを取っていくように感じた。この感情は、この研修で彼らのような立派な学生に出会えなければ感じ得なかったのかもしれない。

出発前は、アメリカの医療とはいかなるものかを五感で感じる研修になるであろうと思っていた。しかし、いざ帰国しこのような形で振り返ってみると、どちらかと言えば「アメリカを見て、今の自分を省みる」という要素が強いように感じる。私は今まで、福島しか知らない、いや、知ろうとしない井の中の蛙以下の状態だった。そんな私がこれから医師としてやっていくにあたり、明らかに足りないものを見せつけられ反省させられた。



カメハメハ大王の前で

例えば英語力。英語論文を見るだけでも嫌気がさしていたが、世界中で発信されている新たな情報は、大抵英語である。母国語が英語であるというアドバンテージは、現地の医師や学生には当然あるが、その壁を乗り越えないと世界からおいて行かれるのは目に見えている。それを乗り越え海外で



活躍する人と出会うことで、壁を越えようとしていなかった自分の姿勢を改める必要があると強く感じた。

そして何より勉強量。トケシ先生もおっしゃっていたが、医者への睡眠や食事はあくまでもオプション。患者のためならそんなことは二の次の精神だ。

今の自分には、患者のためになる医学知識は当然不十分である。それなのに、どうしても楽な方にと甘え、十分な勉強時間をとっていない。アメリカの医師は高い目的意識と、それを後押しするような競争社会で、とてつもない勉強量が必要不可欠である。そんな人たちと「医師」という共通点があるにもかかわらず、かたや中途半端な勉強をし、何となく勉強したふりをして満足している自分がとても恥ずかしく思えた。彼らの知識に近づき対等に渡り歩くためにはもっともっと勉強する時間が必要だと思った。



最後に、こういった形でハワイの研修成果を報告する文才には乏しいですが、この研修に参加して、今の自分に足りないものを強く痛感することができました。こんな素晴らしい機会を作ってくださった大学の先生、事務の方々、その他多くの関係者の方々、本当にありがとうございました。